



総合地球環境学研究所・実践プログラム3 (生活圏) & サニテーション価値連鎖プロジェクト共催

第1回 地球研・北大 TD VISUALIZATION ワークショップ開催報告

2017年1月31日、北海道大学工学系教育研究センターのスタジオにて、TD 研究に映像やアートを活用することへの可能性をテーマにワークショップを行いました。映像を活用した研究事例を専門家にお話をいただいた後、参加者による討論が行われました。



「暮らしの目線」に見るフィールド研究の感性

—映像メディアを活かす超学際研究の表現系の探求

分かりづらいと言われることも多い現代美術の制作過程やその背景を伝えるという観点から、『日常としての表象』(2007年)は作家自身の日常を記録し、生のあり方を表象する表現として制作した。一方、『よしことしゃんらんがわたし』(2012年)は祖父の生きた時代感覚の追体験を試みる表現である。映像独自の時

間体験において、私たちをとりまく世界を新しい形で捉え、人間の「生」を描く映像の実現をねらった。

近年は研究者や調査地の人々の感性を「暮らしの目線」から映像で記録している。これまで、地球研とのコラボレーションにより、YouTube や iTunesU での成果公開、地球研オープンハウスでの映像

活用、フランスを代表する庭師ジル・クレマンに寄り添い制作した映画『動いている庭』の公開と連続講演会を展開してきた。

今後はフィールドを記録する中で見える「人間性」を描く「映像作品」とフィールドの諸課題を学び「反転授業」に活用できる「映像教材」の二軸での制作を行う予定である。



アーティスト/映像作家

澤崎 賢一

知性化され、ステレオタイプ化された関係から解放放って、世界とのより直接的な相互関係に誘う映像作品の制作を行う。近年、研究者や専門家に密着しながら世界各地の多様な自然文化を記録し、作品を制作している。

映像を中心とした教育研究

—研究における映像利用の事例研究

博物館映像学では、映像素材すなわち加工や編集の前の映像データを、博物館の標本、美術作品や史料と同意義と捉え、「学術映像標本」と位置づける。その対象は、自然科学や人文科学の研究・教育全般とし、動きのある有形・無形の事象を記録することが可能である。映像素材を標本として扱うことで、その研究・

収集・保存・教育・展示・広報に広く活用するための学問である。

「展示」への活用事例として、2014年に北大総合博物館での『学船 洋上のキャンパスおしよる丸』展を紹介する。V世へ代替りする際に造船の様子を収めた映像を制作、あわせておしよる丸の100年以上続く歴史を収めた図録を制作

した。さらに AR 技術により特典映像へのアクセスを可能とした。洋上で収録していると、予想外の出来事が撮れることもある。「展示」へと活用する際には、観る側にどう映るかの配慮も欠かせない。

「広報」への活用事例としては、今年度制作した高エネルギー加速器研究機構プロジェクトの映像を紹介した。



北海道大学高等教育推進機構
オープンエデュケーションセンター 准教授

藤田 良治

著書に『フィールド映像術 (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ 15)』(古今書院、共著)など。毎年2月に北大キャンパスでスノーボードと映像制作を組み合わせたユニークな授業を行っている。

TD × VISUALIZATION を考える

サニテーション価値連鎖プロジェクト 片岡 良美

Transdisciplinarity ?

TDを「学際」の発展形とする考えや、「トランスサイエンス」の課題解決とする考えがある。科学だけでは答えを出せないその難しさゆえ、研究者は原学際的＝Multidisciplinaryを脱していないのではないかと。TDのカギを握るのは何でしょうか？

TD Research

TD研究の3ステップは1)問題の構造化 2)問題の分析と知の統合 3)研究成果の社会実装とされている。ステークホルダーとの「協働」である「知の統合」は社会実装の前に位置付けられ、問題解決のためには、「共通の言語」による対話が必要不可欠である。

映像？

一度にたくさんの情報を伝達されると言われる映像は受動的なメディアで、観る人が速度や順番をコントロールできない。それにより、時間の流れとともに、「気持ちの流れ」が生じ、視覚情報＋聴覚情報以上のコミュニケーションが可能である。

TD Visualization

「協働」とはトランスサイエンスコミュニケーションの上になりたち、サイエンス側の研究者が伝えるべきはサイエンスの2つの価値。一つは社会が享受する技術、もう一つはサイエンスの中にある感動。映像の心理学で非専門家も共感させられるのでは？

TD 研究における映像の役割

TD研究の中に映像を取り入れていくと言うのは、単なる事実の記録ではなく、作り手の考えや伝えたいメッセージが重要視されるのでは？(船水) これまでのサイエンスコミュニケーションは専門家のアウトプットをいかに非専門家に分かりやすく伝えるかがメインテーマだったように感じている。TDのカギとなる「協働」におけるトランスサイエンスコミュニケーションとはステークホルダーと研究者が平等に対話することであり、映像は同じ課題に向き合い、各々の理論をもって考えてもらうためのきっかけとして非常に効果的と考えている。知識の伝達だけでなく心を揺さぶるツールでもある。(片岡)

映像が人をどう動かすか？

映像が人の考えや行動を変えた例として、福島県昭和村の「からむし織」の記録映像や、岐阜県東白川村の野鳥保護のため禁止された「カスミ網猟」を題材とした映画『鳥の道を越えて』がある。前者は伝統が薄れていく中で、過去に記録された映像が時を経て、村の伝統文化を再認識するきっかけとなり、後者は人々が映画を通して途絶えた鳥猟文化を伝えていくことの大切さに気づくというものである。(三村) 出来上がった映像を見てももらうことももちろん大切だが、TD研究においては関係者が映像制作を通して、課題を共有しひとつになることそのものに価値があるようにも感じる。(藤田)

映像による時間体験

ハーバード大学感覚民族誌学ラボのステファニー・スプレイ、パチョ・ヴェレズが監督する映画『MANAKAMANA』では雲上にたたずむ聖地マナカマナ寺院へ続く片道10分のロープウェイ内の様子を約2時間、ワンカットで切り取る。情報伝達や感動と言った概念から離れ、観る人に思考の時間を与える。(澤崎) デザインや絵に時間の流れが全くないわけではなく視線の誘導はできるが、基本的には観る人の自由。(和出) フィールドで撮影中に色々な風景を見た後に、ホテルの壁に掛かった絵がとても印象的に映ったことがある。映像に限らず、アートに流れる時間というものがある気がする。(澤崎)

TD 映像学?!

今日のようなTD研究における映像やアートの考察というのは今までにあまり例がない。研究者が映像制作を依頼するのではなく、一緒に映像を研究したいと考えている。(船水) 映像というものがこれだけ世の中に普及して、教育や研究への活用が重要視される中で、文学的側面、認知心理学的側面等の切り口から映像を考察する学問は多々あっても、純粋に「映像」を体系化した学問と言うのは無い。TD研究の中で映像を考えることで、今まで映像を捉えてきた学問分野の枠を越えた新たな「映像学」として概念の体系化ができれば、世界的なインパクトも非常に大きいと感じる。(藤田)

TOUR

北海道大学 大学院工学研究院 工学系教育研究センター
北海道大学 高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター



北海道大学のeラーニング制作スタジオの見学を行い、映像制作やコンテンツの著作権等について制作スタッフとの意見交換を行いました。